平成 21 年度上武大学

全学合同ピアレビューの試行

上武大学教育研究センター

平成 21 年 12 月 21 日

建学の精神

雑 草 精 神

The Spirit

踏まれても踏まれても
不屈の精神をもって起き上がり
絶みなく前進する精神（こころ）

1. はじめに

大学教育における質保証の問題が重視され、本学でも教育の質向上をめざしたさまざまな取り組みを行っているが、その一環としてピアレビューを実施している。前年度は学部別に行ったが、平成 21 年度は、全学合同のピアレビューを試行した。各学部の特性や専門性の違いがある中、全学合同のピアレビューを実施するには困難も予測されたが、専門性や立場の違いは多様な価値観に触れ、思考の広がりや柔軟性を育む機会ともなる。より広い視野に立った質の高い教育の実現をめざし、まず第一歩を踏み出すこととなった。

2. 全学合同ピアレビューの目的・目標

1)目的

学部の特色や専門性を超え、上武大学全体の教育力の向上・改善を図りよりよい教育の実現をめざすことを目的とする。

2)目標

(1)大学教員として豊かな人間性を備え学習者の人間的成長を育むことができる。

(2)大学・学部の教育理念・目的を個々の教育実践に反映させることができる。

(3)学生を成長する力を備えた人間として信頼することができる。

(4)学生の主体的学習を育む教育を実践することができる。

(5)学習内容にふさわしい教育方法を実践することができる。

(6)学生の学力を検証することができる。

(7)より質の高い教育をめざし教育上の課題を明確にすることができる。

3. 実施方法

1)ピア（同僚）について：ピアレビュー開催の趣旨から、同僚（ピア）を学部や専門性の違いを超え広く教育のプロフェッションである本学の全教員とした。

2)実施時期：平成 21 年 6 月 8 日（月）から 19 日（金）までの 2 週間

3)公開授業科目：各学部から 4 科目の計 12 科目とした。

対象科目は、教養、専門を問わないこととし、web 上で公開授業の担当者を募集した。同時に各学部 4 科目の開講が可能となるよう個人的な要請も行い、表 1 の通り公開授業科目が決まった。

4)授業参観の方法：授業参観は 1 教員 2 回以上、そのうち 1 回は所属学部以外の授業を参観することを基本とした。

5)公開授業に必要な資料等ならびに授業参観時の記録用紙等について

参観者の授業内容の理解を助けるために次のものを準備した。

(1)各科目のシラバス

(2)各公開授業について、その科目全体の中の当該授業の位置づけならびに授業概要

科目全体の中の当該授業の位置づけ、単元目標、到達目標、授業内容等について所定の用紙に記入し事前に提出してもらい、授業開始の前に参観者に配布した。

表 1　公開授業科目

公開授業科目名（公開順）	担当者	実施日時・教室	学部	場所
地球科学概論	新井健司	6月9日（火）II限目204	経営情報学部	高崎校舎
小児看護学方法論Ⅰ	田崎知恵子	6 月 9 日（火）Ⅲ302	看護学部	高崎校舎
情報社会とコンピュータ	樽井勇之	6 月 10 日（水）Ⅱ401	経営情報学部	高崎校舎
看護とコミュニケーション	本江朝美	6 月 10 日（水）Ⅳ401	看護学部	高崎校舎
Web デザインⅠ	植松盛夫	6月11日（木）ⅢコンB	経営情報学部	高崎校舎
異文化コミュニケーションE	小川　明	6 月 11 日（木）Ⅳ203	ビジネス情報学部	伊勢崎校舎
中小企業論A	八木孝幸	6 月 12 日（金）Ⅱ5201	ビジネス情報学部	伊勢崎校舎
日本国憲法	吉田一康	6 月 16 日（火）Ⅱ5202	ビジネス情報学部	伊勢崎校舎
在宅看護論	渡部洋子	6 月 16 日(火) Ⅱ402	看護学部	高崎校舎
アカウンティング基礎	廣瀬郁雄	6 月 17 日(水) Ⅰ303	ビジネス情報学部	伊勢崎校舎
成人看護学方法論Ⅴ	森田孝子	6 月 17 日(水) Ⅳ402	看護学部	高崎校舎
日本経営論	谷崎敏昭	6 月 18 日(木) Ⅲ204	経営情報学部	高崎校舎

(3)研修用の記録用紙は、ピアレビューの目的・目標に沿い、教員相互に学び合うための用紙として、授業担当者用、参観者用の 2 種類を用意した。用紙は、公開授業から何が学べたかを明らかにするために活用していくことを目的に作成した。したがって、授業評価を目的としたものとは本質的に異なる。

①授業担当者用記録用紙

本記録用紙の構成は、まず、ⅰ目標に関連する事項、ⅱ目標に内包される主な概念、ⅲ授業者がⅰ、ⅱについて授業展開時に意識したか否か、また意識した場合の程度（かなり意識していた、少しは意識した、ほとんど意識しなかった）ⅳ、ⅲについて判断した根拠となる事実や思い、ⅴ、ⅲに関して授業を通して得られた教育力向上・改善につながる気づきや提案などである。記述方法は、ⅲは該当欄に○印をつける、ⅳ、ⅴについては自由記述とした。

②授業参観者研修用記録用紙

本記録用紙の構成は、ⅰ目標に関連する事項、ⅱ目標に内包される主な概念、ⅲ参観者が授業を参観しⅰ、ⅱに関する内容を観察できたか否か、また観察できた場合の程度（随所に観察できた、少し観察できた、観察できなかった、評価できなかった）、ⅳ、ⅲについて判断した理由や根拠、ⅴ、教育力向上・改善に結びつく自由な意見・提案などである。記述方法は、参観した科目名、所属学部のチェック、ⅲは該当欄に○印、ⅳ、ⅴは自由記述とした。なお、ⅲに含めた「評価できなかった」は、今回のピアレビュー企画の意図にはなじみにくいが、教員間の合意のもとで全学的に実施するため最終的に含めることとした。

(4)記録用紙の提出について

①「授業担当者用記録用紙」：授業日翌日までに教育研究センター

②「参観者研修用記録用紙」：参観授業の終了時事務室所定の場所

(5)公開授業終了後の授業検討会について

ピアレビューにおいては、公開授業終了後の討論は学びを深める上では欠かせないが、今回は諸事情から授業終了後にその機会を設けることが困難であった。やむを得ず、ピアレビュー終了後 6 月 29 日に予定されていた全学の教育討論会でピアレビュー実施結果の報告を行うことになっていたため、そこでまとめて意見交換を行うこととした。

4. 実施結果

一部科目の変更があったほかは計画通り実施された。

1)授業参観者数

参観者は延べ数 79 名、学部別授業参観者数は表２、科目による参観者数は表 3 の通りである。

2)授業担当者による「ピアレビューの目的・目標に関わる授業展開上の意図や教育力向上・改善に向けた提案」用紙の記述内容

(1)「目標（教育力の向上）との関連」「目標に内包される主な概念」に対する授業展開上の担当者の意識（表 4）

授業担当者の 9 割近くが目標との関連を意識しながら授業展開を行っていた。

表 2　学部別授業参観者数（79 名）

学部名	参観者数
ビジネス情報学部	24 名
経営情報学部	23 名
看護学部	29 名
記入なし	3 名

表 3　参観者数別科目数

参観者数	科目数
12 名	1 科目
9 名	2 科目
8 名	1 科目
7 名	1 科目
5 名	1 科目
4 名	4 科目
3 名	2 科目
7 名	科目の記入なし

表 4　目標に関連する内容への授業担当者の意識

項目	割合
授業展開上かなり意識した	46.84%
少しは意識した	41.77%
ほとんど意識しなかった	11.39%

(2)7 つの目標と内包される概念について授業展開上意識したことの根拠となる事実や思い、ならびに授業を通して得られた教育力向上・改善等に関わる気づきや提案についての記述内容の分析結果

項目ごとに自由記述された内容について意味をなす文章ごとに整理した。授業者の目標ごとの

記述項目数は表 5 の通りである。授業展開上意識したとする判断根拠は 12 項目から 15 項目、授業を通して得られた教育力向上・改善等に関わる気づきや提案は、6 項目から 9 項目あげられていた。

表 5　授業担当者による記述項目数

項目（目標とそれに内包される主要概念）	「授業展開上の意識」の判断につながる事実や思いなど	「授業を通して得られた教育力向上･改善等に関わる気づきや提案など
(1)大学教員として豊かな人間性を備え学習者の人間的成長を醸成することに関して　（教育の本質、教育者としての知性･哲学･倫理観、人間性、感化力などを含む）	12 項目	8 項目
(2)大学･学部の教育理念･目的を教育実践に反映させることに関して　（本学教育の特性の自覚と実践への活用、一貫性ある教育など）	12 項目	6 項目
(3)学生を成長する力を備えた人間として信頼することに関して（教育者としての学生観、多様な価値観の尊重など）	15 項目	8 項目
(4)学生の主体的学習を育む教育の効果的実践に関して（学習者主体の教育、創造性を育む教育など）	13 項目	8 項目
(5)学習内容にふさわしい教育技術の提供に関して　（教育技術）	14 項目	8 項目
(6)学生の学力検証に関して　（大学生としての基礎的能力、授業に取り組む意欲、授業の理解状況など）	13 項目	7 項目
(7)より質の高い教育を意図し教育課題を明確にすることに関して（教育力･教師としての人間力向上への努力）	14 項目	9 項目

次に、項目ごとの授業者の記述内容のうち、授業展開上目標内容を意識したと判断する根拠となる事実や思いは、主に次のような内容であった。

(1)人間形成に関しては、基礎的な原理・原則の理解を導く、科目に繋がる倫理観を理論と実践に結び付け理解できるよう教授、社会に出てからも役立つことを意識した授業、教案に自分自身の学問観を盛り込む、授業中の言葉遣いや明確な説明など、(2)教育理念・目的の教育実践への反映に関しては、雑草精神（あらくさだましい）の尊重、学生たちの目標に向けモチベーションを高めるための発問や考える時間を与える、学生の苦手部分の説明強化など、(3)学生観に関しては、若者の豊かな感性と向上心を刺激する、質問に答えた学生の考え方を肯定し様々な考えのあることを認める、既習知識を表現する機会作りなど、(4)主体性を育む教育に関しては、学生に考える教材の提供、学習に興味を持たせる、学生の能力を信じる、思考過程の重視、小テストや宿題を課し発表の機会を作る、主体性や創造性を育てるなど、(5)教育技術に関しては、理論と実践を交えた講義、現場をイメージしやすい実物教材の提示、視聴覚教材の活用など、(6)学力検証に関しては、授業後に書かせた学生の学び、気づきの状況、ワークの感想などから理解状況を確認、小

テスト、発問、プレゼンテーションをさせる、レポート提出、練習問題の提供、理解度の確認のため挙手させるなど、(7)質の高い教育を目指した取り組みに関しては、興味ある内容を授業に盛り込む、新情報の提供に努める、学生の模範となる、学生とともに学ぶ、毎回意見・要望を書いてもらい授業に反映させる、準備を十分に行う、新しい知識を身につける手法を教えるなどであった。

次に、授業を通して得られた教育力向上・改善等に関わる気づきや提案についての主な内容は、(1)人間形成に関しては、知識の伝授にとらわれずあらゆる場で人間性を育む、体験し実感させて生きた知識にするなど、(2)教育理念・目的の教育実践への反映に関しては、持久力、忍耐力養成に力を入れる、体験談や事例提示など、(3)学生観に関しては、信じて見守る、学生の立場に立つ、学生が将来を展望し学習意欲を高めるよう関わる、発問を増やすなど、(4)主体性を育む教育に関しては、授業を学生と共に作り上げていく、講義の中に演習方式を取り入れるなど、(5)教育技術に関しては、学生と教師の相補関係、学生が真剣に取り組む教育力、学生に参加させる、考えさせる、視聴覚教材の活用など、(6)学力の検証に関しては、学習方法指導、小テスト、課題検討、事例活用等による理解度の確認など、(7)質の高い教育を目指した取り組みに関しは、有用な最新情報の教材を持つ、学びあう姿勢を貫く、学生の意見・要望を真摯に受け止める、学生の興味ある内容を課題とする、学生の資質低下、学力差などを全学的問題として取り上げ改善する努力が必要、などであった。

3)参観者による項目ごとの記述内容

各項目に掲げられた内容に関し観察できたか否かについては、「随所に観察（把握）できた」201件、「少し観察（把握）できた 161 件、計 362 件であった。また、観察できたか否かの判断根拠、さらに、授業を通して得られた教育力向上·改善等について自由記述された内容は、授業者の場合の分析同様意味をなす文章ごとに整理した。参観者の目標ごとの記述項目数計 538 の内訳は表 6 の通りである。

記述項目数の最も多かったのは、(5)教育技術に関する 93 項目、記述項目が少なかったのは(7)教育課題の明確化に関する 38 項目であった。その他項目ごとに記述数の違いはあるが 50 数項目から 60 数項目の記述があった。なお、記録用紙には、同じ授業を参観しても詳細に記述されたものから白紙のものまで、参観者により記述内容、量には個人差があった。

表 6　授業参観者の記述項目数

項目	「授業展開上の意識」の判断につながる事実や思いなど	「授業を通して得られた教育力向上･改善等」に関わる気づきや提案など
(1)大学教員として豊かな人間性を備え学習者の人間的成長を醸成することへの影響力　(教育の本質、教育者としての知性･哲学･倫理観、人間性、感化力などを含む)	56 項目	10 項目
(2)大学･学部の教育理念･目的を教育実践に反映させる努力 (本学教育の特性の自覚と実践への活用、一貫性ある教育など)	45 項目	10 項目
(3)学生を成長する力を備えた人間として信頼することに関する姿勢 (教育者としての学生観、多様な価値観の尊重など)	62 項目	18 項目
(4)学生の主体的学習を育む教育の効果的実践 (学習者主体の教育、創造性を育む教育など)	58 項目	15 項目
(5)学習内容にふさわしい教育技術 (教育技術、環境などを含む)	93 項目	26 項目
(6)学生の学力検証　(大学生としての基礎的能力、授業に取り組む意欲、授業の理解状況など)	68 項目	27 項目
(7)より質の高い教育を意図し教育課題を明確化 (教育力･教師としての人間力向上への努力)	38 項目	12 項目

次に、参観者が目標ごとに観察（把握）欄に記入した判断の理由や根拠について記述された主な内容は次の通りである。

(1)人間形成に関しては、豊かな知識、感化力、教育への情熱、真面目さ、熱心さ、文化の熟知など教師の人間性、知性、教育に対する姿勢など、(2)教育理念・目的を教育実践に反映させる努力に関しては、将来を展望した授業展開、教育の継続性、学問の集積性や体系性を踏まえた授業内容など、(3)学生観に関しては、学生を個人として尊重し育む存在とみる、信頼する、言葉づかい、課題の達成ができる指導など、(4)主体性を育む教育に関しては、発問、空欄を埋めさせる、考えさせる機会を持つ、根拠を示す、発言を生かすなど、(5)教育技術に関しては、準備の良さ、学生参加型、対話型、授業を柔軟に作り上げる、体験を組み込む、AV 機器利用、事例提示、わかりやすい教材や使用のタイミング、話術、説得力、パフォーマンス、理論と実践を交えた講義など、(6)学力検証に関しては、学生の反応を見ながらの授業、理解状況の確認、学生の興味・関心ある話題の利用、ミニテスト、発問など、(7)質の高い教育を意図した教育課題の明確化に関しては、日常の授業、学生の理解状況を生かしながらの教育経験の積み上げ、一生懸命伝えようとしている姿勢、意欲をかきたてる授業、理解が不十分そうなところを強調、質問を繰り返すなどであった。

次に、授業を通して得られた教育力向上･改善等に記述された主な内容は次のようである。

(1)人間形成に関しては、道徳観や責任感が衰退していく中での人間教育重視、教員の価値観の押し

つけにならない、学生の受講態度への注意喚起や指導など、(2)教育理念・目的を教育実践に反映させる努力に関しては、明るい講義、教師と学生が親近感を出す工夫、学問の集積性に気付かせるなど、(3)学生観に関しては、学習の動機づけの工夫、価値観の多様性を肯定的に受け止める、大人として扱う、学習態度が気になる学生への指導など、(4)主体性を育む教育に関しては、学生が視点を変えて考えられるヒントを与えその反応をみる、主体性・創造性を育むような刺激を与えるなど、(5)教育技術に関しては、学生の顔を見ながら進める、説明時のくせの指摘、時間配分への留意、パワーポイントの使用方法、板書の字の大きさ、教室の広さ、学生の受講態度など、(6)学力検証に関しては、学生の理解状況確認の具体的方法の提案、(7)質の高い教育を意図した教育課題に関しては、学生とのやり取りを増やす、授業スピードを上げる、時間内に答え合わせをする、楽しい授業の工夫などであった。

なお、参加者の記述の中に、観察そのものが難しい、一回の授業では判断できないなどの記述が計 27 件あり、そのような記述の多かった項目は、(7)質の高い教育を意図した教育課題に関すること 9 件、(2)教育理念・目的を教育実践に反映させる努力に関すること 7 件、(1)人間形成に関することは 6 件であり、記述がなかったのは、(5)教育技術に関すること、(6)学力検証に関することであった。

5. 考察

1)「教育力向上・改善」に向けた教員相互の学びについて

(1)目的の到達状況

今回のピアレビューは、学部の特色や専門性の枠を超え、上武大学全体の教育力の向上・改善を図りよりよい教育の実現をめざすことを目的として初めて試行された。

授業担当者 12 名、授業参観者 76 名（延べ数）計 84 名の教員の参加があったが、実施時期が、学期途中であり授業や会議が並行して行われていたこと、2 つのキャンパスが離れていること、看護学部が臨地実習中であったことなど参加したくてもできない教員が少なくなかったことを考えるとまずまずの参加状況であったといえよう。

授業者、参観者による記録用紙の分析結果をみると、授業者は、目標(1)～(7)の全てについて意図的・積極的に授業に取り入れ、学生に伝えていきたいと考えていた。授業者による取り組み内容・方法等については、共通する内容も見られるが、独自の着眼点や創意工夫等も示された。参観者の記録には、科目名、学部名等の基本事項に未記入のものが含まれていたため、授業者の記録と参観者の記録をつき合わせた分析は行っていないが、主体性を育む教育、授業技術、学力の検証など授業者の記述内容と参観者の記述内容にはかなり重なる記述が多い。

また、授業者と類似内容の記述が参観者の別の項目に記述されているなど、全体的にみて、授業者が意図的に授業で伝えていきたいと考えたことは参観者にも伝わっていたと考えられる。さらに、授業者の記述にはなかったことが、参観者による把握内容として多く記述されており、授業者には新たな気づきにつながったと思う。自信になったこと、反省になったこと、どちらも今後の授業に生かされていくことが期待される。また、参観者も、他者の授業を参観することで、教育力という視点で多くの気づきを得ており、参考になった点、改善点共に自分の授業に反映さ

せていくことができよう。

今回の公開授業は、教養科目あり、専門科目でも基礎となる科目から応用科目まであらゆる科目が含まれていた。これまでどちらかといえば、各教員とも他学部や専門外のことに関心を向けることは少なかったと思うが、どのような授業科目であれ、授業者も参観者も共に「教育力」の向上・改善を目指し相互に学び合うことができ、ピアレビューが目指す方向に第一歩が踏み出せたのではないだろうか。

(2)ピアレビューの方法について

①記録用紙について

今回は、7 つの目標それぞれについて、授業者も参観者も、「教育力」という共通の視点から授業を通して考えたこと学べたことを自分の言葉で記述する用紙を用意した。授業者には、記録用紙に必要事項を全て記述していただくことができたが、参観者の方は、同じ授業を参観しても記述内容、量等にかなり個人差が見られた。自由な意見を知ることができたが、一方、選択肢が用意されたものなどと異なり、書くことへ負担感を抱いた教員もいたと思う。今回、自由な記述から把握できたことを今後に生かし、参観者に負担感が少なく授業改善に役立つ記録用紙を工夫していく必要がある。

また、参観者の記録の中に、「観察そのものが難しい」、「一回の講義では判断できない」「無理である」という記述が 27 件あるが、今回は、把握内容を率直に記述してもらうことを意図し、記名なしとしたため書いた教員にその理由を確認することはできなかった。しかし、主な要因として考えられるのは、ⅰ.本企画の意図を全ての教員に徹底できないまま実施に踏み切らざるを得なかったこと、ⅱ. テーマが「教育力」という極めて基本的、包括的、根源的なものであり、方法も一般的に行われている「授業を参観し、評価する」というものではなく、独自性が強かったため、初めての全学的な取り組みとしては共通認識を得るのが難しかったなどである。

研修用記録用紙は学ぶ手段として用意したもので、評価目的としたものではなかったが、実施直前に最終調整の必要から参観者の用紙に「評価できなかった」という項目を追加せざるを得なかった。この点では企画の一貫性を欠くものとなった。

②授業終了後に検討会が持てなかったことに関して

ピアレビューは、授業後のディスカッションが相互に学びを深めあう場として重要であるが、今回は各授業後にディスカッションの機会を持つことができなかった。そのうえ、6 月 29 日の教育討論会でピアレビュー結果の報告後にまとめて行う予定であったが、そこでも時間的な関係で持つことができなかった。そのため、特に授業担当者から自分の授業に対する参観者の受け止め方を知りたいとの要望が出された。それについても、今回は、授業担当者に参観者の記述内容を開示することを前提としなかったため、参観者の記録を直接授業者に開示することはできず、全体をまとめた報告・配布資料から判断していただくことに留めた。相互に意見交換する中で学びを深め合うという点からは残念な結果となった。

③2 つのキャンパスが離れていることについて

2 つのキャンパスを行き来して授業参観を行うことができたのは一部の教員に限られた。普段は、他学部のキャンパス、教室に出入りすることはほとんどないので、このような機会を持つこ

とにより、他学部の教室環境、学生の傾向などを知ることができよい経験となった。しかし、無理な企画は継続が難しい。今後は遠隔教室なども活用していく必要がある。

2）学生への影響力の面から

今回は、「教育力」に視点を当てたピアレビューであったため、参観者の関心が教師に向く傾向があった。教育において重要なことは、教師の教育力向上が、学生の人間力、学力の向上に結びつくことである。目標に掲げた 7 つの視点は、日々の授業で生かされ、それを積み重ねることによって学生に影響力を及ぼし、学生の人間力、学士力が醸成される。

今後のピアレビューでは、今回の経験を基に、各授業において学生たちに視点を置き、教育の影響が学生にどのように及んでいるかを確認できるような取り組みにしていくことを課題としたい。

6. まとめ

上武大学における第 1 回全学合同ピアレビューの試行結果は、今後の課題を含め次のようにまとめられる。

①上武大学全体の「教育力」の向上・改善を図りよりよい教育の実現を目指した取り組みとしての第一歩が踏み出せた。

②学びの手段として用意した自由記述式の記録用紙からは、多くの学びや改善点が把握されたが、記録用紙は自由度が高く、参観者の一部に負担感を与えたと思われる。今後は、自由な意見を出してもらうと共に、負担感の少ないものを考えていく必要がある。

③授業終了後、記憶が新鮮なうちに討論の機会を設定し学びを深めあえるようにしていく。

④2 つのキャンパスが離れているため、遠隔教室の利用を取り入れ、参加しやすくする。

⑤学習の主体である学生に視点を当て、教育の影響が確認できるような企画を考える。